

## 外部評価委員長による平成29年度博物館事業点検評価の外部評価総括

平成29年度の「博物館使命の四大要素」への評価は、自己評価・外部評価ともに、「歴史と文化の継承」がB、「歴史と文化の窓口」がB、「人々とともに歩む」がA、「やさしさと安心の確保」がBとなった。

「歴史と文化の継承」については、予算の確保や計画の策定などの課題はあるが、収蔵環境のモニタリングや清掃、所蔵資料の所在把握に関する態勢が整いつつあることは評価できる。地域史研究についても、一層の充実と発展が期待できる。

「歴史と文化の窓口」については、ふたつの巡回展が行われたが、目標の入場者数に満たなかったものもあったが、当館学芸員の関与による高い内容の展示を提供できたと考える。自主企画の「開国への潮流」は、神戸開港150年という区切りの年に開催できた当館ならではの展覧会として評価できる。博物館リニューアルにおける「神戸の歴史展示」「コレクション展示」では、基本計画の理念を盛り込んだ詳細設計の段階まで進み、今後の作業・工事の進展に期待がかかる。

「人々とともに歩む」については、学習支援交流員の活動、教育現場での連携授業、地域社会との連携事業ともに、年間を通して多彩な活動を展開できたことを高く評価できる。社会的弱者への配慮についても、リニューアルによるハード面・ソフト面での細やかな配慮を期待したい。

「やさしさと安心の確保」については、リニューアルにおけるアメニティ設備の刷新に、大いに期待したい。1階の無料化は、交流の場としての新たな役割を博物館が担うことでもあり、その運営体制の構築は柔軟かつ慎重な対応が望まれる。博物館としての風格を維持しつつ、より市民に親しまれる空間として生まれる変わることを期待したい。

外部評価をおこなった委員（平成30年度 博物館協議会委員）

別紙の「神戸市立博物館協議会委員名簿」を参照。

<http://www.city.kobe.lg.jp/culture/culture/institution/museum/pdf/kyogikai2018.xls>



## 歴史と文化の継承

### 自己評価詳細

資料保存の点では地味なことではあるが、モニタリング等の実施によって十分な指標が整いつつある。次年度以降、学芸員のなかで共有化を図り、利用していくことが求められよう。また、補修についてはその方向性（計画性）の策定が望まれるところである。

一方で、所蔵資料の所在把握調査によって、全ての学芸員が重要物品にとどまらず網羅的に把握することができるように成し得たことに評価を与えて置きたい。これをベースに、次年度以降の取り組みの素地を図っていくことが望まれる。

収集や調査研究の面では、リニューアルという大きな課題があるなかで、一定の成果がみられたものと解しておきたい。継続が望まれる。

### 外部評価委員コメント

調査研究：目標設定したテーマの調査研究活動を着実に実施しており、自己評価「A優れている」でよいと考えます。

所在確認調査記録のデータベース化が進んだことは大きな成果である。今後のデータベースの公開など工夫も必要。

資料補修については予算確保のうえ、計画的に継続して下さい。多数の資料を整理保管するのはたいへんだと思いますが、全ての学芸員が全体を把握するように努力されたことは評価できる。

資料保存の適正化については、多大な労力を要すると思われ、学芸員のみ負担とするのは長期的に見た場合、限界があると思われる。学芸員の過重負担とならないような体制作りを検討されたい。

文化財保護法改正により、活用がより求められるようになったが、博物館の基本的な任務は文化財の確実な「保存」と後世への「継承」である。それに対する取り組みをもう少しストレートに、わかり易く記しても良かったのでは。

「すべての学芸員が重要物品にとどまらず網羅的にはあくすることができる」ことはすばらしく新しい取り組みの可能性が広がると思います。

【資料保存】博物館にとって、適切な環境で資料を保存することは、何よりも大事なことである建物の老朽化にともない、展示室の温湿度が安定しないなど、資料の劣化が心配される清掃に関しては、学芸員全員による収蔵庫の清掃など、努力のあとがうかがえる。清掃が不十分な場所については人員の増強やチェックシートなどを駆使して、効果的な環境整備を期待したい。資料の保存状況や清掃など日々の地道な努力については、来館者はあまり意識しないものであり、目立たないものであるが、適切な資料保存や環境整備は博物館展示を良好な状態で支える重要な条件であり、学芸員の方々の日々の努力の積み重ねがなければ成し得ない。当館には、貴重な資料も多く所蔵されていることから、リニューアルまでは、防火扉、除湿器の設置など、可能な範囲で適切な保存環境を保持していくことが望まれる。

【調査研究】「六甲」は神戸のシンボリック的存在であり、民間においても、六甲についての研究・調査・講演・成果発表などが進んでいる。近代以降における神戸の都市発展や文化の醸成という面において、六甲が果たしてきた役割はきわめて大きく、調査研究のさらなる深化が望まれる。歴史資料の分析ならびにリスト化は重要な調査活動であるが、同時に、現地調査の充実も図らなくてはならないだろう。自己評価のマイナス面としてあげられている「担当者間の連絡が密に図られていない」「関係団体との情報交換が十分できていない」などの点においては、博物館として優れた研究成果をあげていくためにも、今後継続して改善を図っていく必要があるだろう。とくに後者においては、NPO法人六甲山と市民のネットワーク(六甲大学)、NPO法人神戸外国人居留地研究会など各研究団体との連携・情報交換を密にすることで、調査研究のさらなる充実と発展が期待できよう。六甲山系には、再度公園にある神戸外国人墓地や布引の滝など、歴史遺産や自然景観の優れた名所が点在する。都市のなかにこうした豊かな自然と歴史に育まれた地域遺産を有していることは、神戸の財産であり、都市の魅力を深めることにもつながる。当館を核として、各団体と協力関係を構築しながら六甲をテーマとし地域史の一層の充実と発展を図ることが望まれる。

【資料受け入れ】近代の神戸関連資料が収集できたことは意義深く、「歴史と文化」の継承という点でも評価できる。リニューアル後の歴史展示の充実が期待できる。購入という面でいえば、リニューアルに伴う業務の多忙さからか、購入予算をすべて執行できなかったことは残念である。リニューアル自体は当館にとって大きな事業であり、新たな市立博物館の誕生に期待が膨らむが、リニューアル事業が本格的に進むにつれて、そうした業務に追われて、調査研究や展覧会準備など、本来の業務に専念できないといったことが懸念される。継続的な日々の調査研究は、博物館にとつての「知の源泉」であり「知の蓄積」である。可能な限り、本来の調査研究に専念できるよう、学芸員の方々の業務の負担軽減も考えるべきであろう。

博物館使命の四大要素

歴史と文化の窓口

この活動目標に対する外部評価

この活動目標に対する自己評価

**B**

**B B A B B B B A B B A A B B**

この活動目標に含まれる事業群と評価

自己評価

		委員 A	委員 B	委員 C	委員 D	委員 E	委員 F	委員 G	委員 H	委員 I	委員 J	委員 K	委員 L	委員 M	委員 N
地域史関連の展示活動	<b>B</b>	B	B	B	B	B	B	B	A	B	A	B	A	B	B
地域史関連の研究発表	<b>B</b>	B	B	A	B	A	B	B	A	B	B	B	A	B	B
地域史以外の展示	<b>B</b>	B	B	B	B	B	B	B	A	B	B	A	A	B	B
地域史以外の研究発表	<b>B</b>	B	B	B	B	B	B	B	A	B	B	B	A	B	B
普及活動	<b>S</b>	B	S	S	S	S	S	S	S	A	S	S	S	A	S
特別利用・館外貸出	<b>B</b>	B	B	B	B	B	A	B	A	B	B	B	B	B	B
情報・コンテンツの発信	<b>B</b>	B	B	C	B	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B
展示関係のリニューアル	<b>A</b>	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	S	A	A
情報・図書関係のリニューアル	<b>B</b>	B	B	A	B	B	B	B	A	B	B	B	A	B	B
ショップ&カフェのリニューアル	<b>B</b>	B	B	F	B	B	A	B	A	B	B	A	A	A	B
博物館グッズの販売・開発	<b>B</b>	B	B	F	A	B	B	B	A	B	B	A	A	B	B

## 歴史と文化の窓口

### 自己評価詳細

開港150年という記念すべき年に新たな視点を盛り込んだ「開国への潮流展」が実施出来たことについては評価ができよう。一方で、「ボストン美術館の至宝展」では、入館者数をみれば残念な結果に終わったが、相対的に歴史と文化の窓口の役割は果たせていると考えられる。評価のマイナス面については、今後の振り返りの中で活かす方向を持って欲しい。

館のリニューアルについては、「神戸の歴史展示」「コレクション展示」その他の項目にわたるまで、詳細設計にまでこぎつけることができた。展示工事が本格化する次年度に向けて、細部にいたるまで調整が図れる糧として活かされればと思う。

教育普及の面では、従来から行ってきた各種講座への学芸員の派遣も含め、文化庁の補助事業として新しい講座に取り組めたことが特筆に値すると思われる。この点については、個々の研究も含めて、一層の飛躍を望みたい。

### 外部評価委員コメント

リニューアル後の館内に、小学校社会科教科書でもなじみのある「聖フランシスコ・ザビエル像」がザビエル・ルームにて常設展示されることをとてもうれしく思いました。歴史に興味を持ち始めた小学生にとって、実物（たとえレプリカであろうとも）資料にふれる機会は、大変貴重なものです。伊能小図もやはり。歴史入門期の子どもたちの感性にうったえかける、小学生にとっても身近な資料展示を今後も拡充していただけると嬉しいです。

地域史関連の研究発表：より積極的な取り組みができており、A評価と考えます。

一階が無料ゾーンとして広く市民や観光客へ開放されるのは意義深いことです。カフェ等をリニューアルし、来館者を増やそうとする試みはやがて興味、関心へつながり、足を運んでくださる方々を歴史と文化へいざなう第一歩ではないかと考えます。

地域史関連の研究発表を増加し、その成果を展示に結びつける努力が更に必要と考えられる。そのためには、学芸員の研究調査に取り組む環境を整備することが望まれる。

リニューアルオープンによって、いつその窓口が開かれることに期待しています。

リニューアルを控え、運営には難しい面があったと想像するが、その中で十分に健闘したと評価したい。

「ボストン美術館展」は入館者数が少ない為にC評価としたのだろうが、展示自体は良かったと思う。2-05、普及活動はS評価としているが、前年度比120%以上、ということなので、S評価の根拠をきちんと記した方が良い。2-08、展示リニューアルは、2-08-02がB評価だが、全体でA評価とするのはバランスが悪い。2-08-02も良い成果をあげているので、A評価にしたらどうですか。

特別展「開国への潮流」のアンケート満足度が高かったことは、工夫もさることながら、地域の博物館としての市民からの期待度が高いことがわかる。神戸市の博物館とし盤石の立場となるには地域史関連の取り組みを充実してほしい。

SNSについては、定量的に「反応」を掴むことができ、ダイレクトに感じるができるが、狭い範囲の情報、スポット的な状況に振り回されやすい。駅に貼られたポスターを「何人が見た」「何人が興味を持った」「何人が足を運んだ」かは計測できない。博物館の方々はメディアリテラシーの高い方々と存じてますので、それを自覚していただき、発信の対照が限定されることがないように老若男女にわけへだてのない発信に努めていただきたいです。

【地域史関連の展示活動】当館の常設展示については、古代から近代までの神戸の歴史が年代別に分かりやすく展示されており、充実した内容であると思う。各時代の展示物についても、貴重で興味を惹きつけられるものが多数あり神戸発展の歴史の変遷が理解できる。かねてより課題となっていた常設展示のマンネリ化という点については、リニューアル後の、より訴求力のある、魅力的な展示を期待したい。神戸開港150年を記念した「開国への潮流展」については、新しい史料も加え、神戸の歴史を深く理解できる内容となった点が評価できる。ギャラリー展示については、ホール内の通路にあたる場所でもあり、作品の鑑賞にふさわしい環境とはいえない。人が移動することによって生じる埃や、オープンな通路であるため、一定の温湿度を保てない等、作品への悪影響が懸念される。神戸の地域史については、「神戸の歴史をもっと知りたい」という市民の要望もあるので、そうしたニーズを的確に掬い取って、今後一層、展示の充実を図って頂きたい。

【地域史以外の展示】「ボストン美術館の至宝展」に関しては、来館者の満足度が高かったにもかかわらず、入場者数が伸び悩んだ点については、その要因について十分な検証が必要である。来館者の満足度が高いということは展示内容が充実し展覧会として優れていることを示しているが、入場者数の伸び悩みは、そうした優れた内容が十分に情報発信され得なかったことを示している。新聞、チラシ等の広告のほかに、HPにおける広報の充実、SNSへの情報発信の工夫など、検討の余地があるのではないだろうか。また、一部の来館者から寄せられている展示室が暗く作品が見づらいという声については、改善が必要であろう。美術品にとって適切な照度を保つことは大切であるが、同時に、観客にとって作品が見やすいこと、展示室内を安全に移動できるということも重要である。とくに高齢者や子ども、身体の不自由な来館者の場合、展示室や通路が暗いことは、怪我や事故につながる恐れもある。リニューアルの際には、こうした点も十分に考慮したうえで、「作品に優しい」だけでなく、「訪れる人にとっても安全で優しい」展示環境になることを望みたい。

【展示関係のリニューアル】神戸の歴史展示(1階)の設計について、とくに<近代>については、外国人居留地の模型、計画図の複製のほか、外国人関係の実物資料の展示など、外国人居留地を中心として、トータルに近代神戸の諸相を紹介する意図がうかがえ、西洋文化との関わりという点で、充実した展示が期待できる。「神戸をよく知りたい」という市民のニーズにも合致した展示内容になることであろう。また、人々の暮らしの変化や、阪神大水害、太平洋戦争における空襲、阪神・淡路大震災など、神戸市民が忘れてはならない災害の記憶とその後の復興をとりあげ、それらの資料を展示に加えることも、新しい試みとして、高く評価できる。神戸大空襲については、戦争体験者の高齢化が進み、戦争の悲惨さを知る生存者も少なくなる一方であり、太平洋戦争の記憶自体が人々の脳裏から急速に薄れつつある一方、わずか二十数年しか経過していない阪神・淡路大震災についても、震災を知らない世代が増えている。震災を知らない市民の数が震災を体験した市民を上回るという状況があり、震災の記憶も次第に風化していく恐れがある。「知の拠点」である博物館は、こうした都市の「負の記憶」も、神戸のすがたとして、長く留めていく役割を担っていると考えられる。古代から近現代までを網羅した、神戸のすがたを物語る歴史展示は神戸の都市文化研究のうえでも、重要である。コレクション展示(2階)の「ザビエルルーム」については、実物展示だけではなく、関連資料の展示や年表、さらには「ザビエルの生涯」や「ザビエルの言葉」などを映像で紹介する点は非常に興味深い。コレクション展示にふさわしい展示空間が設計されていると思うが、十分な広さが確保できず 展示計画について十分な検討ができなかった点は残念である。



## 人々とともに歩む

### 自己評価詳細

学校教育ならびに生涯学習の場として、博物館の役割が十二分に果たしているのが現状であり、大いに評価できるところである。学校教育に関しては、この現状に甘んじることなく、新指導要領の改訂を視野に入れた連携授業の模索を行って欲しい。

リニューアル後には、生涯学習に関して学習支援交流員のさらなる育成、新たな視点で事業に取り組んで行くことが望まれよう。休館中の課題としておきたい。

また、地域との連携については、今後も継承するとともに、博物館ならではのかなえられる各種要望などを汲み取っていく必要がある。

### 外部評価委員コメント

アウトリーチ活動としての教育現場との連携授業は大いに評価できる。実際にその授業を受けた子どもたちの振り返りから、そのことが裏付けられている。「古代の生活を体験しよう」の堅穴住居づくりや火おこしの体験は、座学だけではわからない当時の人々の思いを考えるうえで大変貴重であった。社会科を得意とする教師ばかりではない小学校では、より専門的な視点から子どもたちに語りかけ、考えさせてくれる博物館職員の皆様は、大変心強い存在です。これからもよろしくお願ひします。

学校との連携授業の一環として、博物館地下講堂で一般教員向けの研修講座を実施することに関してご検討いただきたい。教育委員会とも連携しながら、6年生の歴史だけでなく、3年生で「市ようすの移り変わり」、4年生で「県内の伝統や文化、先人の働き」などの学習内容が新学習指導要領で示されています。博物館を研修の会場とすることで、単に専門的な知識を深めるばかりではなく、直接博物館の魅力を感じてもらうことにもつながり、それが学校と博物館をつなぐきっかけになるのではないかと考えるからです。

市立博物館として、地域の学校教育や生涯教育の充実に向けて、極めて多彩で充実した講座やワークショップを多数開催しており大いに評価できる。特に学校教育との連携が緊密であり、地域の児童や生徒に美術・芸術及び関連する歴史を身近に学ぶ機会を提供しており、この点は特に高い評価がなされるべきであると考えます。また、今年度は、外国人に日本文化を伝える試みとして、水墨画や浮世絵に関する体験型ワークショップも開催しており、今後も国際都市神戸にある博物館として、このような取り組みを充実させていただきたい。外国人向けのワークショップについては、神戸市にある国際交流に関連する組織（例：神戸国際協力交流センター、兵庫県国際交流協会）や、外国人留学生在籍する地域の大学等に広く案内していただけると、より多くの参加者が見込めるのではないかと考える。

学校との連携は更にパイプを太くしていきたいと現場の立場からも、お願いいたしたく存じます。中高生の反応は、その学校の教師次第です。何万枚のチラシよりも、中・高の社会科教員に対して働きかけるほうが有効です。「社会的弱者への配慮」は、学校においても日進月歩のテーマです。広い視野で継続的に取り組まねばなりません。

【学習支援交流員】学習支援交流員の登録者数、活動回数ともに増加傾向にあることは評価できる。「知の拠点」である当館が旧外国人居留地内にある意味はたいへん大きい。旧居留地案内など、学習支援交流員の方々の継続的な活躍が期待できる。学習支援交流員間に、オープンで良好な関係が築かれ継続していることもたいへん評価できる。ボランティアという性質上、やむを得ないことだが、定例会のみの参加や活動を行わない学習支援交流員がいることは残念である。交流員の方々にとっても、やりがい、生きがいや魅力につながるような活動を模索していく必要がある。また、経験の長い交流員が新規加入の交流員に、活動内容や取り組み方の伝承ができていくことは理想であり、当館関係者、交流員の方々の地道な努力の結果であると評価できる。夏期休暇などを利用して高校生、大学生など若い世代にも、フィールドワークの一環として参加してもらい、神戸の地域史を学んでもらうと同時に、異世代交流を通じて、文化・芸術に対する関心・興味を深めてもらいたい。交流員の方々が開発したツールボックス、体験講座についても、公式HPへの効果的な掲載や、新聞掲載など、メディア媒体へのリリースを通じて市民に広く知ってもらいたい。今後の課題として検討して頂きたい。そうしたことが、交流員の方々の積極的な活動参加にもつながると考える。

【地域との連携】当館が旧居留地連絡協議会会員として各団体との親睦を深めつつ、景観維持に努めている点は大いに評価できる。街の景観保持は、地域の団体や人々の伝統文化への共通認識や、景観というものに対する考え方、思想、価値観などに大きく左右される。長年、旧居留地の美観、街並みを地域の連絡協議会が守ってきた意義は大きく、そうした不断の努力が、現在の旧居留地の魅力にもつながっているように思われる。新しい試みであった夜間開館、コンサートの開催なども神戸の魅力を際立たせるものであろう。今後は、名画とコンサートとのコラボレーションなども試みてはどうだろうか。また、連続講演「神戸を知る」では近隣の博物館・美術館、各大学などと連携して、多彩な内容の講演会にできた。本年度は「アート 歴史 ファッション」を中心に展開されたようだが、来年度に向けては、例えば、歴史のなかでも、貿易・教育・文化などの面で貢献した外国人たちが眠る神戸外国人墓地の研究や阪神間モダニズムの研究なども、市民の関心を惹起できるテーマであると考えられる。NPO法人神戸外国人居留地研究会など近隣団体の近代神戸に関する研究蓄積も多いので、こうした研究団体との協賛も検討課題となり得ると思う。

【社会的弱者への配慮】展示をゆっくり鑑賞するためには、空間的なゆとりやバリアフリー、ユニバーサルデザインを導入した館内設備の充実が不可欠であるが、これまでは導線も悪く、混雑した館内で身体の不自由な方や高齢者が落ち着いて鑑賞するのが難しい状況にあった。リニューアル工事では、こうした方々への配慮が行き届いた施設になることを期待したい。ただ、そうした配慮は、バリアフリー設備のように「目に見える」ものだけではなく、身体的ハンデのある方々や高齢の方々、妊婦の方、それぞれの身になった、細やかな配慮や優しさが求められる。具体的には、一言声をかける、さりげなく誘導する、ソファアなど腰を下ろせる場所が近くにあれば伝える、といった心くばりも必要であろう。「人々とともに歩む」博物館にも、ハード・ソフト両面の細やかな配慮が、今後一層求められる。



## やさしさと安心の確保

### 自己評価詳細

老朽化した設備については、非常用自家発電設備などをリニューアル工事期間中に更新すべく設計を進めている。アメニティ関連については、洋式トイレの増設等リニューアル工事で実施予定。リニューアル後の運営体制の検討も概ね順調に進めている。

### 外部評価委員コメント

平成28年4月の障害者差別解消法の施行を受け、学校現場でもユニバーサルデザインの考え方が浸透しつつあります。共生社会の実現にむけた合理的配慮の提供は義務となっております。トイレの洋式化や多機能トイレの充実、段差の解消、案内表示のわかりやすさは、欠かすことができない大切なポイントであると考えます。そのことがリニューアルに向けた設計に反映されている点は評価できます。

使命の第4項目の要素を「やさしさと安心の確保」とするには、やや違和感がある。第4の使命を果たしていくためにも、評価項目（事業群）の再検討が必要ではないでしょうか。

リニューアルに期待しています

【施設管理】設備全体が古くなっており老朽化が進んでいるため、必要な予算を確保し、計画的に点検・更新していくことが必要である。当館は、旧横浜正金銀行時代の建物であるため、高い天井や回廊、ドリス式の円柱など、当時の面影を残した格調のある外観・内装で、長く市民に親しまれてきた往年の雰囲気を大事にしながら、新しい神戸の顔として誕生することを期待したい。博物館という性質上、常に展示品への照度に気を配らなければならない館内に十分な採光を確保することは難しいかもしれないが、展示室以外の休憩スペースや、通路では自然光を十分に取り入れ、訪れる人々が憩い、くつろげる、明るい空間になることを望みたい。

【アメニティ関連のリニューアル】トイレについては、大幅に洋式化を進めることが課題であったが、リニューアル設計に反映することができた点は評価できる。女性用トイレについては、洋式化を進めるとともに、トイレ内に簡易なパウダコーナー(化粧コーナー)を設置することができれば、より望ましい。手洗いスペースとは別に、パウダコーナーを設置することは、近年、大学、音楽ホール、百貨店などにおいても、普通に見受けられるようになった。手洗いスペースでの混雑を避けるためにも、設計に反映できれば、来館者にとってより快適なスペースとなろう。

【リニューアル後の運営体制】1階の無料化にともなう運営体制については、初めての試みでもあるので、あらゆる場合を想定して臨むことが必要であろう。無料化になれば、来館者が自由に出入りでき、人と人、人と展示作品の「交流」という面から、博物館の新しい役割が期待できる。ただその一方で、ある程度の静謐さ、博物館としての品格が損なわれることのないよう、来館者のマナーにも注意を払い、問題点があれば調整・改善していくことが必要であろう。